

終わってないし

南出謙吾

【登場人物】

陽一
洋子
伸治
麻子

【本編】

【1】

マンションのリビング。整理整頓が行き届いていて、綺麗にしてある、男の部屋。キッチンや寝室は別にあるようだ。一人暮らしにしては少し贅沢な部屋。
テーブルに男（陽一）がひとり座って、なにかの用紙に立ち向かっている。真剣だ。

陽一・・・特技。

必死に考える。

陽一・・・特技。技。

あちこち眺めたり、自分の手を見たりする。

陽一・・・無し。

と、書く真似をして、やめる。缶コーヒーを一口飲む。携帯を触りだす。缶コーヒーを倒してしまう。

陽一 まじか。

慌ててキッチン（舞台外）へ。キッチンペーパーを数枚持って戻って来る。にわかに慌しく、こぼれたコーヒーをしっかりと拭き取る。拭き取り、目視し、よしとする。ふき取ったキッチンペーパーをゴミ箱へ。不燃ごみと一般ごみのゴミ箱があり、ちゃんと確認して、一般ごみの方に捨てる。一連の動作は習慣化されたものではなく、意識してそうしているように見える。テーブルに戻り残った缶コーヒーを飲み干す。空缶を、ちゃんとそれ用のゴミ箱に捨てる。やはりよくトレーニングされた几帳面さだ。後処理を終えると、ソファへ。ソファには、既にタオルケットに包まって女（洋子）が眠っている。無理やり潜り込む。洋子は起きてしまう。

洋子 臭い。

陽一 ん。

洋子 臭いって。

陽一、ソファから追い出される。

洋子 コーヒー、飲んだでしょ。
陽一 飲んだ。
洋子 嫌だっけってんじゃん。
陽一 ごめん。
洋子 できたの、履歴書。
陽一 まだ。
洋子 早く。

机に向かう。

陽一 特技って何？
洋子 そろばんとか、書道とか。
陽一 級のあるやつ？
洋子 何かないの？
陽一 ないよ。級ないと駄目？
洋子 わかりやすくないとデキル人かわかんないでしょ。

携帯を手に取り、画面を見せる。

陽一 はやくも村長。
洋子 ふざけてんの。
陽一 マネージメントのセンスあるよ俺。これわりとリアルなんだよ。
洋子 ぜんっぜんすごさ伝わんない。
陽一 人口も千人超えたし。
洋子 (髪やタオルケットを整えながら) どうでもいい。
陽一 すごくない、このゲームを俺の同級生がつくったって、なあ。
陽一 何回も何回も聞いた。
陽一 貴重な自慢話なのに。
洋子 一回で充分。
陽一 特技っていつてもなあ。
洋子 もう適当にマラソンとかにしとけば。
陽一 得意じゃねえし。
洋子 バレるわけじゃないでしょ。目の前で走って見せるわけじゃないんだし。
陽一 頭いいな。

陽一、履歴書に書く。

洋子 ふつうですけど。
陽一 何分とか聞かれたら？
洋子 2時間位なんじゃない。
陽一 フルマラソンなの！？
洋子 しらないって。
陽一 2時間何分。
洋子 適当に決めたら。19分とか。

陽一 ずうずうしくない。せめて25分位にしとかない。ちよつとは遠慮して。
洋子 いいじゃん特技なんだし。すごくなきゃ。
陽一 オリンピックとかに出場できてしまうんじゃないか。
洋子 基準まで知らないし。
陽一 45分とか、・・・53分かな。一応。な。

陽一、書こうとする。

陽一 いややつぱは3時間台だろどう考えても。
洋子 好きにしたら。

陽一、書く。

陽一 趣味。
洋子 読書。
陽一 普通すぎだし。
洋子 そこ冒険する意味ある？
陽一 何が好きとか、聞かれたら？
洋子 夏目漱石とかにしとけば。
陽一 マニアック。
洋子 めちゃくちゃ有名ですけど。
陽一 読んだことないなあ。
洋子 国語の時間に読んだことないの。
陽一 ない。
洋子 坊ちゃん、とか。
陽一 そりゃそのくらい知ってるけど。
洋子 ほんとに？
陽一 どんな話。
洋子 坊ちゃんが・・・あれ。あれなんだっけ。
陽一 ぜんぜん覚えてないじゃん。
洋子 そんなとこまでつつこんでこないって。だいたいそこ全員読書だし。
陽一 そうか？
洋子 バイト雇うのに趣味関係ないじゃん？余ったスペース埋めてるだけのコーナーなんだから。
陽一 変わったの書いたら、逆にイタイし。
洋子 イタイって？
洋子 宗教とか、デモとかとかしてそうじゃない？
陽一 そうか。
洋子 いいから、大人しく右へならえしときなさいって。
陽一 懐かしいなそれ。右へく倣え！
洋子 右向け右でしょ。
陽一 前へ倣えか。
洋子 あ、そっち。
陽一 なおれ！気をつけーって、やったよなあ。
洋子 陽一にも素直にそんなことしてた頃があったんだ。
陽一 小さく前へ倣え、つてのもあったよな。あれなに。

洋子 ちゃんと世の中に適応できる子を育んでるの。陽一みたいににならないように。
陽一 俺、すげー前へ倣えしてたけど。
洋子 いいから早く書いて。

陽一、言われるがまま、「読書」と書く。

陽一 志望の動機。

洋子 なに？

陽一・・・金がある。借金がある。

洋子 ちゃんと。

陽一 人と話をするのが好きなので、お客様センターの仕事に興味があるので。

洋子 いいじゃん。

陽一 だろ。空気読むことだけはちゃんと仕込まれてきたんだから。

陽一、志望の動機を書き、全体を眺める。

陽一・・・うそばっか。

洋子、陽一から履歴書を取る。

洋子 もつたいない。

陽一 ん。

洋子 けっこういいところに勤めてたんじゃん。

陽一 過去の栄光だよ。

洋子 なんてやめたの。

陽一 いいじゃん。

洋子 聞かれるよ。面接で。

陽一 年収が間違ってたって。

洋子 は？

陽一 ネットでさ、「あなたの年収間違ってます。」って。あるじゃん。

洋子 しらない。

陽一 あるんだって。それにひっかかったっていうか。

洋子 騙されたってこと。

陽一 騙されたってのはちがうけど。自己責任。

洋子 話す気ないならいい。

陽一 夢感じんじゃん。そりやそうかもなあって思うし。それがひでー会社でさ。

洋子 きたない字。

陽一 聞く気あるの。

洋子 ん。

陽一 つまんねーだろーなー。お客様センターなんて。

洋子 しょうがないじゃん。家賃もスマホも、あるんだし。

陽一 要る金が追いかけてくるのから、逃げてるただけみたい。

洋子 家賃もつと安いところに引っ越したら。

陽一 それも金かかんじゃん。

洋子 何か月かですぐ取り戻せるって。

陽一　そこまで失いたくない。

洋子　はあ？見栄？

陽一　なあ、健康で文化的な最低限度の生活にスマホはいんのかな。

洋子　引越し嫌なら死ぬしかないね。

陽一　極端すぎだし。

洋子　極端じゃない。

陽一　いいんだって。

洋子　知ってる。人間金のせいで、オレオレ詐欺やったり、石油で戦争したりするんだよ。

陽一　しねーし。

洋子、履歴書をテーブルにちゃんと置く。

陽一　オッケー？

洋子、履歴書を拝んで。

洋子　うかりますように。

陽一　（真似て）うかりますように。

洋子　他人事？

陽一　切実。

洋子　うかったのわかったら、メールして。

陽一　どうして。

洋子　責任感じるし。路頭に迷ったりしたら。

陽一　はあ？

洋子、姿勢を正す。

洋子　・・・元気だね。

陽一　なんだよ、あらたまって。

洋子　ちよっとくらい、あらたまってもいいじゃん。2年もつきあったんだし。

陽一　（突然、声を荒げる）そんな来週でいいだろ。

洋子　（驚くが、落ち着いて）おおきい声ださないで。わかったから。

陽一　・・・住むところは。決まったの。

洋子　決まった。

陽一　どこ。

洋子　友達の家。

陽一　え、また居候。

洋子　うん。

陽一　え、男？

洋子　男。

陽一　・・・かっこいいの。

洋子　まあまあ。普通の人。

陽一　（鼻で笑う）普通って。

洋子　仕事してるし。普通に会社で。

陽一　へえ。

洋子 人生、簡単に脱落するんだよ。

陽一 既にしてるし。

洋子 エリートぶって。

陽一 ぶってねえし。

洋子 もうちよつとちやんとした人だと思ったのに。

陽一 それはごめん、ちよつと騙した。

洋子、再び机の履歴書を手に取り、見る。

陽一 どうして、何回も見るの。

洋子 どんな子だったんだろって。

陽一 そんなん、履歴書みてもわかんないじゃん。

洋子は履歴書で陽一の歴史を追っている。

洋子 ね、ここ、汚れてない。

陽一、洋子の足を持つ。

洋子 ゴムないよ。

陽一 ん。

洋子 するなら買ってきて。

陽一 大丈夫。

と云うなり、洋子に抱きつく。

洋子 いや。

陽一 なんで。

洋子 ゴム買ってきてよ。

陽一 金ないもん。

洋子 じゃ、だめ。

陽一 なんでだよ。いいじゃん。ゴムくらい。

洋子 いるでしょゴム。

陽一 なんでゴムもねえんだよ。

洋子、陽一を振りほどく。

そして、その勢いそのまま立ち上がり、カバンを持つ。

陽一 なに。

洋子 買ってくる。ゴムと、履歴書。

陽一 履歴書。

洋子 コーヒーこぼしたでしょ。

陽一 ちよつとだけ。

洋子 書き直し。

陽一、面倒くさを前面に表し、机に突っ伏す。

洋子 なんかいる。

陽一 いらない。

洋子 ちゃんとしてよ。出て行ったらほんと他人なんだから。

陽一 は？今？なに言ってるの。

洋子 だから来週だって。

陽一 ああ。

洋子、出て行く。

陽一 あ、コーヒー。

洋子に頼もうにも、もう居ない。

陽一 ま、いつか。

履歴書を雑に置く。

陽一 ……ゴムと、履歴書を買う。女子。

にやけてくる。起き上がる。

陽一 いいなあ。すげーポジティブ。

床に横になる。タオルケットを巻きつける。

ミノムシになる。うごめく。

陽一 受かりてえええええ。

【2】

そのまま数日が経過している。陽一は眠っているようだ。洋子ではなく、コンビニの袋を持った、男（伸治）が、部屋に入ってくる。コンビニの袋から缶コーヒーを取り出しテーブルに置く。陽一に近づく。眠っていることに呆れる。おもむろに陽一の足を取る。そして突然プロレス技をかける。

陽一 いたいいたいいたい。

伸治、陽一を解放する。

陽一 なにすんだよ。

伸治 寝んなよ。この短時間に。

陽一 コーヒーは。

伸治、首でテーブルを指す。

陽一 ありがとう。

伸治 ぜってー、体に悪いそれ。

陽一 いいじゃん。

陽一、財布を取りに行こうとする。

伸治 おごるよそんなくらい。

陽一 まじで。

陽一、缶コーヒーを飲む。伸治も、コンビニの袋からもう一本の缶コーヒーを取り出し、じっと見る。

陽一 お前も飲むんだ。

伸治 やめてただけだな。

陽一 コーヒー？

伸治 でもいいや。

伸治、思い切って、空けて飲む。

伸治 うまい。

陽一 なんだそれ。

伸治 飯は？

陽一 減った？

伸治 減らない？

陽一 俺燃費いいから。ハイブリッド車。

伸治 何もしてないだけじゃん。

陽一 余計な二酸化炭素を排出するだけだし。エコエコ。

伸治 何があったの知らないけど、同窓会位顔だせよ。小さいゼミなんだし。

陽一 会いたくねえし。

伸治 お前だけだよ。音信不通なの。

陽一 お前は、ほら、あっち側の人間だから。

伸治 あっち側？

陽一 ちゃんとできてる方。

伸治、呆れる。

陽一、携帯ゲームを始める。

伸治 仕事は。何か見つけたの？

陽一 お客様センター。

伸治 へえ。

陽一 きついよー。切ったら取る、切ったら取る。ブロイラーみたい。

伸治 そんなもんだろ、仕事ってのは。

陽一 どうせならもっと人の役に立ちてえなあ。

伸治、鼻で笑う。

陽一 ブロイラーの方が役に立つな。食べられるし。
伸治 いえてるな。

陽一、ゲームをやめる。

陽一 あああ、ブロイラーになりてえ。
伸治 働いてんならいいけど。

陽一 お前は？

伸治 なに。仕事？

陽一 うん。

伸治 営業。通信系。

陽一 つうしん？

伸治 光ファイバー売ってんだ。

陽一 かつこいいな。

伸治 そうでもないよ。

陽一 買ったらどうなるの、それ。

伸治 買ったら言うか、ま、インターネットが早くなる。

陽一 パソコンないと駄目なやつ？

伸治 一応な。

陽一 速いどうなるの？

伸治 どうなるって・・・うれしくなるんじゃないやね。使ってる人は。

陽一 へえ、すげえな。

伸治 3%位の情報で感心されると、申し訳ない気分になる。

陽一 知ってるけどな。

伸治 馬鹿にしてんのか。

陽一 偉いな。伸治は。

伸治 バイトでもな、続けたほうがいいよ。お前ところはよく知らないけど、何やったって
陽一 だいたい一緒だよ。絶対やめんな。

陽一 だからそんなの知ってるし。

伸治、立ち上がる。

陽一 なに。

伸治 便所。

陽一 そ。

伸治、いなくなる。

陽一、コーヒーを飲む。

陽一 世の中は、どんどん進歩していくねえ。

携帯を眺める。

陽一 …… だいたいセンタースマホ持ち込みないし。それが致命的なんだよ。

ゲームを始める。

陽一 …… 金取ることばっか。

伸治が戻ってくる。手に缶酎ハイを持って、うれしそうにしている。

伸治 まあ、なにこれ。

陽一 何って。酒。

伸治 ピーチ。

陽一 うん。

伸治 彼女。

陽一 そんなのよく見つけるよな。

伸治 冷蔵庫の中でひと際輝いてた。

陽一 勝手に開けんなよ。

伸治 いるの。

陽一 いるよ。

伸治 優しいな。こんな奴に。

陽一 うん、優しい。

伸治 何歳。

陽一 まず歳か。

伸治 いいじゃん別に。

陽一 よつつ上。31。

伸治 へえ。なんかいいな。かわいい？

陽一 即、ビジュアル。

伸治 いちいちうっさいな。

陽一 かわいいよ。

伸治 まじで。自分で言う。名前は。

陽一 洋子。

伸治 (馬鹿にしたように笑う) お笑いみたいだな。陽一&洋子。

陽一 …… (少し落ち込む) 俺も思った。

伸治 何してる人。

陽一 不動産屋の事務かなんだよ。たぶん。

伸治 たぶんって。

陽一 最近、会ってないし。

伸治 あそう。

陽一 一ヶ月くらい。

伸治 一ヶ月!? 長くない。

陽一 長いよ。

伸治 どうして。

陽一 出てったからだよ。

伸治 は? いつ。

陽一 一ヶ月前だろ。そりゃ。
伸治 今は？その子は？
陽一 知らない。男の家にいるんじゃないね。男の家に行くって言うってたから。
伸治 男って？
陽一 普通の人。普通に働いている。・・・まあまあかっこいい。
伸治 いやいや、彼氏とか？
陽一 知らない。そこまで突っ込んだことは、話してないし。
伸治 突っ込めよそこは。
陽一 まあでも・・・いいや。
伸治 それって終わってるってこと、だよな。
陽一 終わってねえし。俺の中では。
伸治 いやいやいやいや。
陽一 まじで。
伸治 次いこ、次。
陽一 いいよ、俺、洋子としか付きあったことないし、こえーよ、他の女。

陽一、ゲームを始める。

伸治 こわくないって。
陽一 でもいい。

伸治、プロレス技をかける。

陽一 痛いって。
伸治 何してんだよ。
陽一 ゲーム。
伸治 今しなくてもいいだろ。
陽一 毎日こつこつやんないといけないんだって。
伸治 何のゲームだよ。
陽一 あれだよ、今井んとこの。
伸治 ああ。やってんだ。
陽一 せっかくだし。
伸治 今井同窓会来てたよ。
陽一 へえ。社長だろ。
伸治 らしいな。自分で会社作ったって。
陽一 すっげえな。
伸治 ……まあな。ウンコのくせに。
陽一 ……ああ。ウンコな。
二人 ……ウンコな。

共に知る、面白いエピソードがあるのだろう。二人、思い出すように笑い出す。

伸治 二次会があつて。ウンコがな、二次会の金全部出すって言い出して。
陽一 さすが、社長。
伸治 すっげーカチンときた。生意気な感じで。

陽一 殴った。
陽一 ううん。カチンときただけ。ごつつあんです！だよ。
陽一 よえー。
伸治 いやいや、醸し出す金持ち具合が半端なくて。みんな、それで当然みたいな感じだったし。
陽一 空気読んだだけだよ。みんなで、ごつつあんです！あはははは、だから。
伸治 楽しいんじゃないね。
陽一 ふうん。
伸治 どんなゲーム。ウソコのゲーム。
陽一 町をつくるだけだけど。
伸治 おもしろい？
陽一 地味におもしろい。ムラから順番に発展させておつきくするだけなんだけどな。
伸治 うん。

陽一、携帯の画面を見せる。

陽一 工場とか、家とか。畑とか。
伸治 うん。
陽一 ダムも作った。凄いだろ。
伸治 悪い、凄いかはわからん。
陽一 今、町長。
伸治 微妙に偉いな。
陽一 もうすぐ市長。
伸治 最後どうなるの。
陽一 さあ。今んとこ、終わりは見えないな。無いんじゃないね、そういうのは。
伸治 終わらないの。
陽一 見てみ。こうやって、ここに、コンビニ設置して。
伸治 うん。
陽一 しばらく待つと、出来る。
伸治 ……で。
陽一 できると、収入はいるから、また、何か作れる。
伸治 いつできるの、コンビニ。
陽一 明日。
伸治 なげー。
陽一 ここがな、ポイントで。スマホでほんとの金払うと、すぐ完成するんだけど。
伸治 そこで儲けてるんだ。
陽一 そうじゃね。だから俺は待つ。金払うと他に色々できるんだろうけど、払わなくても、まあ、地味にこつこつとやればできる。
伸治 ふうん。
陽一 だから、ここまでするのに、すげー苦労した。
伸治 びつくりする位無駄な苦労だな。
陽一 儲からん客だよ。
伸治 自慢気に言うことか。
陽一 あったりまえじゃん。
伸治 いくらかかるの。コンビニ完成させるのに。

陽一 10円。
伸治 10円？
陽一 なに。
伸治 たったそれだけ。
陽一 でもな、これに金はらったら人間終わりだと思って。我慢してんだ。
伸治 あそう。10円。
陽一 建物によって違うけど、コンビニは10円。
伸治 ウンコに10円。
陽一 ま、そういうことだな。
伸治 我慢するんだ。
陽一 それに、こうやって広告クリックすると、少し完成が早まる。
伸治 いいよ。
陽一 いい！出す。出させる。10円。
伸治 いいって。金がないとかそういう我慢じゃねえし。
陽一 無理。無理無理。
陽一 なんなんだよ。

伸治、10円を財布から取り出して、テーブルに置く。

伸治 はやく、10円払え、コンビニ、おごるから。
陽一 ほんといいんだって。

伸治、陽一に掴みかかって。

伸治 お前が、ウンコの10円で一日待ってる姿が耐えられないんだよ！
陽一 考えすぎだよ。ずっと待ってるわけじゃねーし。
伸治 いいから早くしろって。
陽一 わかったわかった。

陽一、携帯を操作して、コンビニを完成させる。

陽一 なんかすげー抵抗あるんだけど。
伸治 はやく。
陽一 はい。できた。
伸治 ……どれ。
陽一 これ。

携帯画面に表示される村の中にある1軒のコンビニは、とても小さい。顔に画面を近づけてじっくり見る。

伸治 ……なるほど。
陽一 見た？
伸治 うん…で。
陽一 もう、完成。収入が入る。

伸治 いつ。

陽一 明日。

伸治 あそう。

陽一 ……もう10円出せば、すぐだけどな。

伸治、突然陽一の携帯を奪い、捨てる。

陽一 ちよおい、なにすんだよ。

陽一、慌てて拾いに行く。

伸治 むかつくなー。

陽一 画面われたらどうすんだよ。

伸治 なんだそれ。

陽一 金なんてこんなもんだよ。明日まで待って完成させるから、コンビニが愛しくなるんだ
つて。

伸治 愛しくなるの。

陽一 我慢すれば、なる。

伸治、ソファに横になる。

伸治 なんか、馬鹿らしくなるな。そんなんで儲けやがって。社長て。

陽一 まあいいじゃん。

伸治 やめろ、そんなん。

陽一 うっざいなあ。ほっとけ。

伸治、静かになる。

陽一 寝たの？！

伸治 そんな一瞬で寝るか。

陽一 びっくりした。

伸治 ……変わらんのかなあ。

陽一 なに。

伸治 なんていうの、商売の、尊さ？

洋一 なんだそりゃ。

伸治 訪販なんて人間扱いされねえし。人間じゃねえけど嘘ばっかついてるし。ほぼ詐欺だし。

陽一 そうなんだ。

伸治 そ。それが俺の仕事。

陽一 ご苦労が耐えませんが。

伸治 ジャガイモ栽培してた方が何倍も感謝されるわ、世の中に。

陽一 それいなら、ブローラーの方がうまいな。

伸治 見せて。

陽一 投げんなよ。

陽一、伸治に携帯を渡す。

伸治、画面を見る。ある建築物を指差して。

伸治 これはなに。
陽一 打ちっぱなし。ゴルフの。
伸治 そんなのまであるんだ。
陽一 普通の会社員に娯楽を提供してやろうと思って。
伸治 なに様だよ。
陽一 金巻き上げるんだよ。
伸治 女取られたからか。究極に空しい奴だな。
陽一 そんなとちがうし。
伸治 まんまだろ。
陽一 その大通りにあるじゃん。打ちっぱなし。
伸治 ああ、あるな。
陽一 だから。
伸治 よくわからん。その理屈。
陽一 再現するんだ。この町。
伸治 へえ。ご苦労さん。

伸治、陽一に携帯を返す。

陽一 こないださ、その前通ったときにな。
伸治 ん。
陽一 (画面を指して) このゴルフ場。
伸治 ああ。
陽一 三階建てのゴルフの練習場が全部埋まってて。全部の巣箱に鳥いるみたいな。
伸治 世の中の奴は金あるんだな。
陽一 そこから何球も飛んでくるんだ。球が。カン、カカン、カン。て。満席だからひっきりなし。銃弾雨嵐みたいな。
伸治 みんなゴルフ巧くなりたいたいんだな。
陽一 血の気の多い町だなあと見て。
伸治 元気があってよろしい。
陽一 イラっとしない？なんか。
伸治 巧くなりたいじゃん。ゴルフ。かっこいいじゃん。
陽一 そうか？

伸治、何かを思いつき、座る。

伸治 そうだ。
陽一 ん。
伸治 今度、連れてきてやる。女の子。
陽一 は？
伸治 友達で、いい子いるんだよ。ネットで知りあったばっかなんだんけど。すげーノリいいし。言ったら来るよ。
陽一 ええ？
伸治 もしかしてすげーいや？

陽一 すげーいやとかじゃねーけど。

伸治 なら決まり。

陽一 唐突だなあ、なんか。

伸治 そういうの、全然平気な子だし。

陽一 でもなあ。

伸治、缶酎ハイの蓋を開ける。飲みだす。

陽一 あ。

伸治、そのまま、ぐいぐい飲む。

陽一 お前、ちよっやめろ。

陽一、伸治から缶酎ハイを取り戻そうとする。

伸治、機敏にかわそうとするが、取り戻される。

陽一 やっていいことと悪いことあるだろ！

伸治 そんなに、怒んなって。冗談じゃん。

陽一 缶酎ハイ飲んだだろ。

伸治 飲んだよ。

陽一 飲んだ口で飲むな。

伸治 意味わかんねえし。

陽一 洋子、缶酎ハイ滅茶苦茶嫌いなんだよ。

伸治 あ、そう。

陽一 そう。

伸治 でも、いないんだろ、もう。

陽一 いないよ。

伸治 忘れろって。

陽一、部屋を出ていこうとする。

伸治 どこいくんだよ。

陽一 冷蔵庫に戻しとく。

伸治 はあ？飲みさしだろ。

出て行く。

伸治 まじか、あいつ。

伸治、缶酎ハイを飲む。ちゃんと啜って、空いた缶をゴミ箱に投げる。外れる。

陽一が戻ってくる。

陽一 かわいいの。

伸治 あん？

陽一 その子。
伸治 ……結構かわいい。
陽一 ……へえ。

陽一、ゆつくりと、うれしい顔になる。

【3】

突然、ラジカセからがさつなレゲエ調の音楽が大きな音量で流れ始める。明転。麻子が駆け込んでくる。大きなコンビニの袋いっぱい酒やスナック菓子を開け、家飲みパーティーが始まる。麻子はものすごい勢いで話し始める。

麻子 並ぶ場所がちよつとずれてただけ。たった2メートル位。

伸治 うっわー。かわいそ。

麻子 ほんとは一番なのに。

伸治 でも、それって、何人か並んだとき、気づかない？

麻子 ちがうんだって。二番目に来たウザそうな子らのグループが私の後ろじゃなくて、横に陣取って。

伸治 え、まじで。せー。

麻子 そしたら次から次と、そっちに並んで。あつちは、50人位になったのに、こっちはひとり。

伸治 ひとり？！

麻子 完全に多勢に無勢な感じじゃん。でも、事實は私が一番のり。でしょ。

伸治 間違いない。

麻子 10時になって開店したから、当然って感じで入ろうとしたら、店員に止められて。あつちの後ろ並んでくださいって。はあって感じ。

伸治 ひでーな。

麻子 私一番ですって、訴えても、聞いてくれないし。証人いっぱいいるはずなのに、誰も何も言わないし。

伸治 ええ！

麻子 ひとり10番目位にきた男の人が、「たしかに、ずっといたけど並んでいるとは言えないなあ」みたいなことを、言い出して。お前は何様で何時からいたんだよって感じじゃん。私は朝4時ですけど何かって感じじゃん。なにこの空気読めて無い感。意味わかんないし。

伸治 ほんとだよな。

麻子 結局、イタい奴って思われながら、屈辱的に後ろに並んで。でも、ぎりぎりを買なくて。

伸治 うっわー。

麻子 ありえないでしょ。

伸治 でも、もうちよつとだけ、早い目に折れてたら、買ったんだよな。

麻子 ……え、折れる必要くない？

伸治 ……ないない。

麻子 なにが真実かでしょ大事なのは。50人がかりだからって、関係ないじゃん。

伸治 うんうん。ないよな。

陽一 ん？

伸治 なあって。

陽一 え、あうん。
伸治 ごめんね、こいつ、ほんとに見知りなんだよ。
麻子 あ、私も。
伸治 うっそ。
麻子 ほんと。
伸治 見えない。
麻子 でも、ほんと。
伸治 へへ。
麻子 あ、信じてないでしょ。
伸治 信じる。
麻子 ありがとう。
伸治 それに。ここだけの話、あいつ緊張してんだよ。まだ童貞だからさ。
陽一 ちがうって！

声は思いのほか大きかった。

伸治 ・・・そんなにムキになんなよ。ほんとにそうみたいになるじゃん。
麻子 えへそうなんですかあ。
陽一 ちがうよ。
麻子 ほんとは。
伸治 どっちだと思う。
麻子 童貞じゃない。
伸治 露骨に言うなあ。
麻子 いいじゃん別に。
伸治 正解。な。
陽一 うん。
麻子 やったー。
伸治 おめでとー。すげーノリいいじゃん。
麻子 だってせつかくだし楽しまないと。
伸治 あ、いいこと言うなあ。な。

陽一は携帯ゲームを始めている。

伸治 おい、陽一、何やってるんだよ。
陽一 ゲーム。
伸治 おまえなあ。
陽一 ちよつとだけ。
伸治 ちよつとだけって。
麻子 なにやってるんですか。
伸治 超くだらんやつ。人間腐ってるよこいつ。

麻子、ゲームを覗きに来て、陽一はその距離に少し戸惑う。

麻子 あ！これ、私もやってる。
伸治 え？

陽一 ほんとに。
麻子 うん。

麻子、携帯を取りに行く。

伸治 麻子ちゃんもやってるの。
麻子 うん。結構はまっている。
伸治 流行ってんだね。

麻子、陽一に画面を見せる。

麻子 ほら。すごいでしょ。

陽一 え、なにこれ。

麻子 都知事。

陽一 都知事!?

麻子 陽一君は。

陽一 まだ、もうすぐ市長。

麻子 あああああ。でも、その頃って結構盛り上がりますよね。

陽一 火力発電。

麻子 都知事クラスになると、水力じゃぜんおいつかないですよ。

陽一 公害大丈夫?人減らない?

麻子 それなりにあるけど、公園いっぱいつくれば、そんなに減りませんよ。発展するから、減る以上に集まってくるし。

陽一 へえ。

麻子 見せて。

麻子、陽一の町を見る。

麻子 あ。これって。もしかしてこの辺り?

陽一 うん、再現してみてるんだ。

麻子 やるやる。私も最初、自分の住んでるとこみたいにしたし。

陽一 やるよね。それがこないだ、すごいんだって。

麻子 なに。

陽一 これでコンビニつくったら、ほんとに同じ所に来月オープンすることになって。あれ、あそこ。

陽一、窓の外のコンビニ予定地を指し示す。

麻子、見に行く。

伸治 偶然だろ。馬鹿じゃね。

麻子 あるある。

伸治 あるよねー。

麻子 私も再現してて。スペースたりなくなったから、近所の駄菓子屋つぶしたら。なんと、一カ月位たってほんとにつぶれたの。リアル駄菓子屋。

伸治 うそお、こえー。

麻子 私のせいみたいに思っちゃって。駄菓子屋のばあちゃんにほんと悪いなって思った。
伸治 そりゃそう思うと思う。
麻子 なんかそういうのあるよね、これ。
陽一 絶対ある。
麻子 そうだ。プレゼントしましょか。火力発電所。
陽一 え、いいの。
麻子 いいですよ。町友（マチトモ）になってください。
陽一 もちろん。
麻子 ちょっと待って。送るから。

麻子、携帯を操作している。

陽一も、携帯を操作している。

伸治はつまらなさそうにしている。

麻子 送った。海岸の辺り見て。
陽一 ……ほんとだ。
麻子 でも、建築に一ヶ月位かかるから。
陽一 そんなにかかるの？
麻子 結構レベル高いインフラだし。でも、課金千円かかってよければ、3日に短縮できますよ。
陽一 ……千円？
麻子 あ、短縮してから送りますね。
陽一 え？え？それって。
麻子 いいですよ。おごります。町友の記念に。
陽一 いいよそんなの。
麻子 大丈夫、お金ありますから。
陽一 え？いや、だからって。
麻子 宝くじ当たって、ゆとりあるんです。
伸治 へえーいくら。
麻子 去年だけどね、500万。
伸治 500万！
麻子 すごいでしょ。はい、送りました。短縮済みの火力。3日で完成しますよ。
陽一 ……ありがと。
麻子 あと、国立公園もひとつ送るとききますね。火力だけだと公害で結構人死ぬし。
陽一 え。
麻子 気にしない気にしない。
陽一 あの、課金の短縮はいいから。
麻子 火力の完成に間に合いませんよ。
陽一 自分でやるから。
麻子 そうなんですか。
陽一 いくら。
麻子 500円。
陽一 ……うん。

麻子と陽一、携帯を操作している。

麻子 町友も申請しましたから承認だけ、しておいてください。
陽一 うん。
麻子 ちゃんと遊びに来てくださいね。
陽一 絶対行く。

麻子、陽一の画面を覗く。

麻子 町長で火力つくるなんてすごいね。一気に発展しますよ。
陽一 へえ、楽しみ。
麻子 ほんとにリアル火力ができたらすごいね。
陽一 さすがにないでしょ。ははは。

取り残され気味の伸治、割り込んでくる。

伸治 そのゲーム、俺らの同級生が作ったんだよ。な。
麻子 ほんとに？
陽一 うん。
伸治 まじで。社長。
麻子 すっごい。じゃ神様じゃん。
伸治 同じゼミで。冴えない奴だったけど。人間わかんないね。
麻子 伸治君はやらないの。
伸治 いい。
麻子 おもしろいのに。町友んなる。
伸治 絶対やんねー。
麻子 頑固だなあ。
伸治 それにしても、宝くじ500万って、いいな。
麻子 たぶん神様がね、損害賠償を払ってくれたんだと思う。
伸治 なに損害賠償って。
麻子 人生波乱万丈だったから。
伸治 へえ。
麻子 ……気になる？
伸治 気になる気になる。
麻子 じゃあ、麻子の人生三大事件！の時間でーす。
伸治 いえーい。

麻子、拍手をする。伸治、のっかる。

伸治 いいの。なんかすげー楽しみ。
麻子 まずね、じゃ3位から。
伸治 うん。
麻子 なんだろなー。
伸治 え、なにそれ。わかんないの。
麻子 すっごいあって。
伸治 すっごいあるの。

麻子 すっごいある。はい。3位。
伸治 (盛り上げる) 3位〜!
麻子 高校の時なんだけど。なっかなか友達できなくて。
伸治 見えない。
麻子 今はね。でも、そういう時期ってあるでしょ。
伸治 (軽い) あるある〜。
麻子 もう!結構深刻だったんだから。
麻子 親心配させちゃいけないし、自分ちに友達装って、「アサコちゃんいる〜?」って電話したりしなきゃいけないし、自分宛の年賀状大量に偽造しまくったこともあるし。
伸治 そんなことまで。
陽一 わかる!
伸治 お前も?
麻子 ね。やるよねえー!

麻子の距離感に、やはり陽一は戸惑ってしまふ。

陽一 ……うん。
麻子 でもバレて。親超泣いて。こっちが泣きたいのに。
伸治 へえ。
麻子 でも、やっと一人友達できて。ただ、そういう時期にできる友達って、あったり前かも
しんないけど、ちよつとつていうか、けっこう変な子で。だから、ガンガンいじめとかあつて。でも、高校時代は二人でなんとか乗り切ったの。だからもうほんと親友で超マブダチみたいで。なのに、卒業して少ししたら、自殺して死んだ。
伸治 ……え!え、その子が。
麻子 うん。
伸治 ……で。
麻子 それだけ。それだけつてもあれだけど。
伸治 そう。
麻子 ま、これがだいたい、100万位の価値かな。
伸治 なに。
麻子 神様への請求額的に。損害賠償?
伸治 ああああああ。
麻子 で、2位が。
伸治 あ、2位ね。陽一、2位だつて。
陽一 うん、2位ね。
麻子 これはけっこう最近、去年とかじゃないけど、彼氏ってゆうか、男の人に、なんか、だまされたっぽい感じになつて。
伸治 うわ、それ系くる。
麻子 どんどんいくよお。
伸治 で、で。
麻子 で、超色々あつて、その人とは、なんとか別れられたんだけど、百万とかじゃないけど、何十万か借金みたいなのできて。
伸治 まじで?!
麻子 当然ヤバイ系のバイトとかしなきゃいけなくなつて。

伸治 ヤバイ系って。
麻子 そんなの、内緒にきまってんじゃん。
伸治 うわー気になるー。
麻子 それは駄目。言えない。
伸治 そうなの。で。
麻子 で、それも騙されたつぼくってお金もらえなくて。どうしようもなくなって。自殺未遂に失敗した。
伸治 麻子ちゃんが？
麻子 うん。
伸治 ・・・自殺未遂に失敗って。・・・だったら、死んでない？既に。
麻子 え？あ、ほんとだ。
伸治 未遂に成功ってことだよね。
麻子 そうそうそう。あはははは。おもしろい。馬鹿みたい。
伸治 びっくりした。だったら麻子ちゃんすでに幽霊じゃん。
麻子 ほんと、うつける。

一同、笑うが、麻子のあまりの爆笑に、伸治と陽一はひいてしまう。

麻子 あああ。お腹痛い。
伸治 ほんと。
麻子 で、1位。
伸治 きたー！1位どうなるの。
麻子 1位はね。
伸治 うん。うん。
麻子 今も私が生きていること。
伸治 は？
麻子 これはもう一億の賠償責任ありだね。だから、一億あたらないうちは、絶対寿命は全うしてやるうって決めてんの。以上。
伸治・陽一 ・・・。
麻子 あー！、ほら引いたでしょ。
伸治 別にいいんじゃない。麻子ちゃん生きてても。
麻子 仕方ないよね。蟻だって、胴体真つ二つでも、けっこうしぶとく生きてる位だし。
伸治 ・・・いや、麻子ちゃん、いい。
麻子 なに。
伸治 いい。な。
陽一 うん。
伸治 それだけキツイこと、ここまで明るく振り返られるんだし。すげーよ。俺だったらとっくに精神崩壊してると思う。たくましいと思うよ。な。
麻子 意外と丈夫なんだよ人間。
伸治 なんだか、言葉の重みが違うね。
麻子 そんなことあないって。
伸治 なあ、飯いかない？
陽一 なに。また腹減った？
伸治 減らない？
陽一 ほんと生命力に満ちてるよな。

伸治 どこいく？
陽一 せめて出前とかにしない。
伸治 なんだよ。
陽一 休みの日とか、外あんまり出たくないんだよね。損した気分になる。
伸治 おまえなあ。
麻子 いいよ、出前で。
伸治 ごめんな。ほんと我俣な奴。
陽一 悪い。
伸治 じゃ、俺買ってきてくる。近くですげー旨いとこ知ってたんだ。
陽一 巴寿司。
伸治 そう。ご馳走すんよ。
麻子 いいの。
伸治 楽しかったし。お礼。
麻子 やった。
伸治 ちよっ待ってて。
陽一 店ないかもよ。こないだ俺これで（携帯ゲーム）撤去したし。
麻子 ははは、こわーい。
伸治 あっそ。

伸治、出て行く。

麻子 おもしろいねー、伸治君。変わってるよねー。
陽一 ……だろ。
麻子 ……音楽、消していい？
陽一 あ、うん。

麻子、ラジカセを止める。
二人、携帯ゲームを始める。

陽一 （画面を良く見て）…あれ。
麻子 それもプレゼント。
陽一 ……ありがと。

陽一、それ以上の対応ができず、ゲームを続ける。

麻子 なんかね。
陽一 ん？
麻子 前世が同じ気がしますね。
陽一 ……え？何？
麻子 私と。
陽一 俺？
麻子 うん。二世代前。
陽一 ……ごめんわかんない。
麻子 ふうん。
陽一 いや、あの、うんわかった。わかったっていうか。

麻子 また、遊びにきてもいいですか。
陽一 え。いいよ。
麻子 ゲームじゃなく。
陽一 ここ？
麻子 うん。
陽一 ……別に、いいけど。

陽一、ゲームに集中する。
麻子も、ゲームをはじめる。

麻子 完全に変な子だとおもってるでしょ。
陽一 そんなことないよ。
麻子 人前苦手だし、わけのわからないことを口走ってしまう。
陽一 作り話？
麻子 ううん。違うけど。
陽一 ふうん。
麻子 ほんとですけど。
陽一 人前ってったって…俺と仲治だけじゃん。
麻子 上手に話せる人とか苦手だし。
陽一 なら、こんなふうに出てこなかったらいいのに。
麻子 それは嫌。
陽一 そうなんだ。

陽一、わかった風な顔で何度かうなずく。
仲治が、慌てて戻って来る。
息を切らしている。

陽一 え。
麻子 うっそ。
仲治 この世界は、ウンコに支配されている。
麻子 え？
陽一 まじで。

陽一と仲治、爆笑。
陽一、窓辺へ。外を眺める。

麻子 なに。
仲治 つぶれてた、寿司屋。
麻子 え。ほんとに。

麻子も窓へ。
ふたり、外を眺めている。

陽一 俺が支配してる。

鉄骨を叩くような建築の音、重機のエンジン音が不気味に鳴り響く。伸治、出て行く。

そのまま数日後となり、建築の音は遠く聞こえなくなる。

【4】

夜明けの頃。

陽一は、ソファに戻りゲームを始める。

二人は少しの緊張感とともに特別な時間を、初々しく虚勢を張って過ごしてる。

麻子 原形とどめてないね。この町。

陽一 そもそも無理だよ。発展させすぎた。

麻子 もったいない。ちゃんと再現できてたのに。

陽一 そんなこと言って。ライバルの成長が怖いんだろ。

麻子 ちがいます。

陽一 空港の建築短縮しよ。800円だし。

麻子 追いつく気？無理だよ。

陽一 わかんないよー。最近の資本投下半端ないし。

麻子もゲームをはじめる。

麻子 楽。一緒にいると。

陽一 俺が、廃人だから。

麻子 軽く。

陽一 ひどーい。

麻子 褒めてるんだけど。

陽一 (ゲームの画面を見て) この人らって、かわいそうだよね。

麻子 ん？

陽一 されるがまま。なに考えてんだろ。

麻子 考えるわけないじゃん。

陽一 でもさ。科学もどんどん発展してるし。ひよっとしたら、何か考えてるかもしれないって思わない。アンドロイドみたいに。

麻子 おなかすいたなあとか？

陽一 あ、コンビニできた、ラッキーとか

麻子 なんか、かわいいじゃんそれって。

陽一 わかる。かわいい。

麻子 空気つくったら読むとことか超かわいくない？

陽一 ん、なに、どっち。ゲーム。

麻子 ゲームにきまってんじゃん。

陽一 それなに。

麻子 知らない？

陽一 課金かかる。

麻子 かかるけど、空気つくったら読むから、デモとか減るし。

陽一 そんなに起きてないよ。
麻子 起きるんだって。ほっといたら。
陽一 へえ。
麻子 いちいち建築期間伸びるし。
陽一 詳しいね。
麻子 それくらい調べたら出てくるし。
陽一 そうかあ。いかんな。

陽一、真剣にゲームに取り組む。

陽一 コンビニ、全然オープンしないよね。現実の方ね。近所の。
麻子 撤去するからでしょ。
陽一 関係ないだろ。
麻子 あるんって。
陽一 まじで。おいとけばよかった。
麻子 見てみて、もうすぐ総理。
陽一 総理！まじで。いつの間に。
麻子 ほらね。無理なものは無理。差は開く一方だねえ。
陽一 うわー。きつー。
麻子 せいぜい、コツコツと発展させるがよい。
陽一 ようし。なあ、見てみて。

陽一、携帯画面を麻子に見せる。

麻子 なに。
陽一 原発。
麻子 え。
陽一 原子力発電所建てようかな思って。
麻子 えええ。なんか、自粛しなきゃ。今どきそういうの。
陽一 ゲームじゃん。
麻子 ゲームでもさ。
陽一 時効だって。世の中の的に。
麻子 最悪。
陽一 ちょ待ってよゲーム。
麻子 県知事でしょ。ロックかかってるんじゃない。総理にならないと。
陽一 課金5000円いるけどロック解除できるみたい。
麻子 そんなにかかるの！
陽一 さらに建築時間短縮するのに2000円。
麻子 うわー。
陽一 でも、すごいよ、1つでこれだけのエリア全部賄えるし。公害ないから公園もつくらなくとも人減らないみたい。
麻子 禁断のアイテムでしょ。
陽一 それってちよつとテンションあがんない？
麻子 課金も高いし、やめといたほうが。
陽一 いい。いつまでも麻子ちゃんに追いつけないし。えい。

麻子 あつ。
陽一 買った。
麻子 思い切るなあ。
陽一 すぐバイト代も入るし。
麻子 心配。
陽一 え。
麻子 爆発したりしたらどうすんの。
陽一 そんなときは、一からやりなおす。追いつけないじゃん、こうでもしないと。
麻子 陽一君の町、なくなったら、寂しい。
陽一 ごめんな、無茶して。
麻子 知んないからね。どうなっても。
陽一 大丈夫だって。超レアケースだよ。
麻子 大事にして。
陽一 ・・・うん。

なぜか、一瞬、いい雰囲気。
麻子、携帯を操作する。

陽一 あれ。
麻子 プレゼント。
陽一 なにこれ。
麻子 犬小屋。
陽一 そんなのあったっけ。
麻子 うん。小さい頃、犬飼いたかったの。
陽一 飼わなかったの。
麻子 親が動物あんまり好きくじゃなくて。臭いとか特に。
陽一 変なの。かわいいのに。
麻子 だから。
陽一 収入はいるの、これで。
麻子 ううん、アクセサリ。ただの飾り。
陽一 そうなんだ。
麻子 ごめんね、あんまりスペースないのに、無駄なものつくって。邪魔だったら撤去していいから。
陽一 いいよ。そのくらい。

遠くから犬の鳴き声。

麻子 聞こえた？
陽一 うん。
麻子 ほら。ちょっと怖くない？偶然じゃなくない。
陽一 ありえないでしょ。
麻子 そうなんだけど。
陽一 じゃ、ためにさ、このアパート撤去してみる？
麻子 ここ？
陽一 うん。残してたんだ、まだ。(画面を見せて) ほら、これ。

麻子 うん。え、これを撤去するってこと。
陽一 うん。そしたら俺らいなくなる？
麻子 どうかな。・・・本気？
陽一 覚悟はいい？
麻子 まだ1億円あたってたてない。
陽一 あたらないよそんなの。それこそ超レア。
麻子 大丈夫かなあ。
陽一 ・・・じゃ、いくよ。
麻子 ・・・ちよっと待って。
陽一 なに。
麻子 やめとこ。なんか、怖い。
陽一 ぜって大丈夫だって。
麻子 やめとこって。
陽一 いくよ。3，2，1。

麻子、目を閉じる。しゃがみ込んで耳をふさぐ。

陽一 撤去。

陽一、あたりを見わたす。

麻子、そおっと目を開き・・・

麻子 大丈夫みたい。
陽一 うん。
麻子 撤去された？
陽一 あ、本当に撤去しますか？はい、いいえ。になった。
麻子 なにそれ。
陽一 はい。と。
麻子 あっ。

間

陽一 生きてる？
麻子 変わらず。ほんとに撤去した？
陽一 (画面を見せて) ほら。
麻子 なんだ。心配して損した。
陽一 大丈夫だっていってんじゃない。
麻子 わかるけど。
陽一 跡地に社宅建てよ。
麻子 なにそれ。
陽一 ふつうの会社員が住んでるんじゃないね。普通に働いてる。まあまあかつこいい。給料の愚痴とか言ってる。そのくせことなかれ主義で。されるがままでさ。
麻子 なにいつてんの。
陽一 イメージ。
麻子 なんだか眠くなってきた。

麻子、ソファの上に横になる。
横になって、陽一の足に自分の足を乗せる。

陽一 なに。
麻子 ぜいたく。
陽一 ん？
麻子 人間の上に足を乗せるなんて、っていう、ぜいたく。
陽一 ？・・・ぜんぜんいいよ。
麻子 雑魚寝の生存競争に負け続けだったし。
陽一 なにそれ。
麻子 合宿とか、ぐだぐだの飲み会の最後とか。いつも。
陽一 好きな人いるのに、他の子といい感じになられちゃうやつ？
麻子 競争が無いってのは、ほんといいね。
陽一 それってさ。
麻子 そんな意味じゃなくて。
陽一 いいけど、実際いないし。
麻子 あああ・・・犬飼いたかったなあ。

朝日が差し込んでくる。

麻子 もう朝だね。完全に。
陽一 うん。
麻子 嫌な感じ。みんな起きてくるし。
陽一 俺も、思う。
麻子 今日も、バイト？
陽一 うん。
麻子 眠くなんないの。
陽一 眠くなる。
麻子 休んだら。
陽一 でも、いつか休んだら、二度といかない気がする。
麻子 いいじゃん。そんならい。
陽一 でも。
麻子 ねえ。
陽一 ……だめなんだって。決めたの。

麻子、足を乗せたまま、体を起こす。

麻子 なにを。
陽一 ちゃんと、働くって。
麻子 どうして。
陽一 戦ってんの。俺は。
麻子 意味分かんないけど。行きたいのそんなに、仕事。
陽一 行きたくねーよ。
麻子 なら。

陽一 でも、そうするしかないじゃん。言い訳したくないし。
麻子 一日くらい。いいじゃん。

麻子、陽一をじっと見る。

陽一、じっと見返す。

麻子 ここで寝る。

麻子、再び横になる。

陽一、麻子の足の指をじっと見つめる。
足を手に取り、指を丁寧に調べる。

麻子 なにしてんの。

陽一 指、ちいさいな。

麻子 ふつうだと思っただけ。

陽一、調べ続ける。

麻子 行くんだね。仕事。

陽一 ……うん。

麻子 じゃ、帰って寝る。一緒に起きるのつらいし。

陽一 え……うん。

麻子、帰る準備をする。

麻子 ……また。

陽一 まって。

麻子 なに。

陽一 ほんとに帰るの。

麻子 ほんとに休まないでしょ。

陽一 ……。

麻子 だから。

陽一 ……あのさ。

麻子 なに。

陽一 いかなかったら、いるの。

麻子 いるよ。

陽一 まじで。

麻子 どうするの。

陽一 まじか。

麻子 ……はやくきめて。

陽一、考え抜く。

陽一 ……じゃ。

麻子 なにそれ。……じゃね。

麻子、出て行く。
陽一、座って目を開いたまま、じっとしている。
随分と長い間、じっとしている。

【5】

そのまま数日後となる。夜の八時頃。
伸治が入ってくる。

陽一 どうしたの。
伸治 近くまできたから。いなかったから、その辺で時間つぶしてた。
陽一 そうか、悪いな。
伸治 今、仕事終わり？
陽一 そ。
伸治 遅いな。
陽一 残業だよ。
伸治 よく続いてるよな。
陽一 慣れた。慣れるもんだね。

伸治、携帯を操作し始める。

伸治 な、これ。

伸治、携帯の画面を陽一に見せる。

陽一 え！お前も始めたの。
伸治 仕事やめてから始めたんだ。暇だしな。
陽一 もう市長。
伸治 そ。
陽一 早いな、成長。
伸治 すぐ追いついてやる。
陽一 町友なろうぜ。
伸治 もちろん。
陽一 追いつくのは無理だけどねー。
伸治 甘いな、途上国の勢いを知らないの。遠慮しねーし。
陽一 こっちから申請するよ。

陽一、携帯を操作している。

伸治 俺さ、仕事きまったんだよね。
陽一 もう？さすがだな。
伸治 うん。

陽一 なにするの、今度。

伸治、持ってきた缶コーヒーを飲む。

伸治 今井んどこ。

陽一 ……え。ほんとに!?

伸治 うん。

陽一 ……えどうして。

伸治 どうしてって言われても。条件とか。

陽一 ……じゃ、これ。(ゲーム) つくるってこと。

伸治 つくるっていうか、プロモーションの企画、みたいな。

陽一 なんかすげえ。教えてよ色々。裏技とか。

伸治 あったり前じゃん。教えてやるよ。

陽一 うわ、うれしいな、それ。

伸治 正社員の可能性もあるらしいし。

陽一 飯でもおごるよ。

伸治 いいよそんな。

陽一 気にすんなって。

伸治 祝うようなことじゃねーし。

陽一 いいじゃん。ウンコも、いい奴だって。

伸治 いい奴だったよ。すげー親身になってくれたし。

陽一 ほら。

伸治 立派なもんだな。

陽一 そりゃそーだよ。

陽一、携帯を操作する。

陽一 携帯見てみ。

伸治 ん。

伸治、携帯を操作する。

伸治 あれ。

陽一 俺からのプレゼント。

伸治 なにこれ、犬小屋。

陽一 俺も、犬飼いたかったし。

伸治 俺も?

陽一 ささやかだし。いいだろ。気を使わなくていいし。

伸治 まあ。

陽一 何の役にもたたないけどな。

伸治、画面をしばし眺める。

伸治 麻子にも、もらったんだよな。これ。

陽一 あそうなんだ。

伸治 でも、いや。ありがたく、設置しとく。

二人、ゲームを続ける。

伸治 ……麻子な。

陽一 なに。

陽一、手を止める。

伸治、ゲームを続けている。

伸治 ……俺な。

陽一 うん。

伸治 すげー、言いくいんだけどき。

陽一 なんだよ。

伸治、ゲームを続けている。

伸治 ……付き合うことになった。

陽一 ……はあ?!

伸治 驚いた。

陽一 うそ。

伸治 ほんとだよ。

陽一 ……どうして。

伸治 なりゆきで。

陽一 ……そう。

伸治 頭おかしいって思ってるだろ。俺のこと。

陽一 別に。

伸治 (茶化して) あんな、イタイ子とつきあうなんてとか。

陽一 思ってないよ。

伸治 イタイよ相当。あいつ。まじで。

陽一 うん。

陽一、ゲームの画面をじっと見る。

伸治 未遂とか、ほんと、マジみたいだし。

陽一 うん。

伸治 宝くじとか、完全に嘘だし。

陽一 ……(驚くが) ああ、らしいな。

伸治 でもな、ちゃんと生きてて。

陽一 うん。

伸治 無理やり生きてて。なんか、この世にしがみついているみたいな。

陽一 うん。

伸治 オロナミンCのCMみたいで。

陽一 うん。

伸治 そこがさ。ファイター一発!みたいな。

陽一 リポビタンD？
伸治 そっち。・・・そんな感じですがー食欲で。
陽一 うん。
伸治 かわいいんだよ。
陽一 うん。
伸治 すげー。
陽一 いいな。
伸治 いいだろ。イタいけど、かわいいし。
陽一 うん。

会話がとまって、ゲームが続く。

伸治 でも、麻子が。
陽一 うん。
伸治 怪しい宗教っぽいのにハマッてて。
陽一 そうなの。
伸治 うん。すげー勧誘されてて。
陽一 まじで。
伸治 どうしたらいいかな？
陽一 うゝん。

陽一、答えが出せず、沈黙してしまう。
伸治、ゲームをやめる。

伸治 ま、いいけど。大問題じゃねーし。
陽一 いいんだ。
伸治 なんだかんだいっても、ウソコの仕事、決まったし。
陽一 うん。
伸治 一応、それなりに、晴れやかではある。
陽一 よかったじゃん。
伸治 お前だけには報告しようと思って。
陽一 うん。
伸治 つてことで、帰る。用事、そんだけ。
陽一 あ、そうなんだ。
伸治 うん。

伸治、出て行くこうとする。

陽一 ・・・ちよまてよ。

伸治、普段の陽一からは想像できない反応に驚く。
陽一、伸治を無理やり連れ戻す。

陽一 知ってるだろ。
伸治 あん。

陽一 俺と麻子のこと。

伸治 知ってる。

陽一 だったらどうして。

陽一、伸治に掴みかかる。

伸治 なにすんだよ。

完全に伸治の勝利。陽一は飛ばされる。

伸治 別につきあってたわけじゃねーだろ。

陽一 つきあってる。

伸治 麻子言ってたぜ。そんなんじゃないって。

陽一、伸治に再び掴みかかる。

伸治 八つ当たりすんなよ。

陽一、再び投げ飛ばされる。

伸治 それでも、悪いな思ってるよ。まじで。それなりに。

伸治、出て行く。

陽一 なんだあいつ。世の中腕力か。

布団に横になる。携帯ゲームを始める。
だが、集中できない。やめる。

陽一 あーわっけわからん。

ふたたび、ゲームを始める。

陽一 え・・・あれ。

画面を凝視する。

何かゲームの世界で何か事故が起きたようだ。

陽一 ……ちよつと、ウンコ。嘘だろ。

携帯を操作する。

陽一 まじかよ〜。

携帯を投げつける。

我慢ならず、本棚などに八つ当たりする。
狭い部屋の中ひとしきり暴れ倒す。横になる。

陽一 ……終わった。

【6】

翌朝に思えるような数日後。日曜日のひるさがり。

陽一はそのまま、荒れ果てた部屋の中で眠っている。

そこに、洋子が入ってくる。陽一は気がつかない。

洋子 ……。

洋子はじつと陽一がおきるのを待つ。

陽一、ようやく人の気配を察し、おもむろに目を覚ます。

陽一 ……。

洋子 部屋にいたって無用心だから鍵しめなさいって、何回も言ったじゃん。

陽一 ……ごめん。

洋子 あがっていい？

陽一、起き上がる。うなずく。

陽一 ……どうしたの。

洋子 ……調べにきた。

陽一 なにを。

洋子 生きてるか。

陽一 余裕で生きてるけど。

陽一、部屋を片付けはじめる。

洋子 ひどいね。部屋。

陽一 今日だけだつて。

洋子 大丈夫？

陽一 ……どうして。

洋子 ん。

陽一 どうして、調べるの。

洋子 んん、責任感？

陽一、部屋を片付けはじめる。

陽一 座ったら。

カバンから一枚の紙を取り出す。

陽一 洋子、見て欲しいものがあるんだけど。

洋子 なに。

陽一 これ。

陽一、その紙を渡す。洋子、それを見る。

洋子 ・ ・ ・ なにこれ。

陽一 タイムカード。

洋子 わかる。

陽一 まだ、続けてんだ。お客様センター。

洋子 そう。

陽一 見て。

洋子 なに。

陽一 無遅刻無欠勤。

洋子 ・ ・ ・

陽一 どうこれ、すごくね。5勤2休、5勤2休。なんか綺麗じゃね、並び。

洋子 ほんとだね。

陽一 何回もさ、危機的状况におちいったんだけど。

洋子 ・ ・ ・

陽一 いやほんと、しゃれんなんない危機もあった。

洋子 ・ ・ ・

陽一 それでも、休まなかったんだ。

洋子 偉いね。

陽一 これ、ほんとは、持って帰っちゃいけないんだけど。

洋子 だろうね。

陽一 眺めてると、明日も行こうって思えたから。毎日持って帰ってるんだ。

洋子 ・ ・ ・

陽一 約束したからさ。ちゃんと働くって。

洋子、うなづく。

陽一 (笑って) 初日からやばかったけど。

洋子 ふうん。

陽一 こんど、マラソン大会とかあつてさ、お客様センターなのに。すげーやべー。どんな畏

なんだよって感じだよな。

洋子 自業自得じゃん。

陽一 ・ ・ ・ そう思う。

洋子 適当に書くからだよ。

陽一 でもな、練習するんだ。マラソン。

洋子 陽一が。

陽一 なんか、バレたくないし。

洋子 そっこーバレる思うよ。

陽一、携帯を手を取る。

陽一・・・ただ。

洋子ん。

陽一ゲーム。

洋子うん。

陽一バイト代ほとんどこれにつっこんじやって。全然金ないんだよね。だから、借金はあんまりかえせてなくて。そこはごめん。

洋子馬鹿じゃないの。

陽一だから、やめたんだ。ゲーム。

携帯を置く。

陽一俺、ゴルフにも誘われてて。

洋子ゴルフ？

陽一凄くない。俺がゴルフだよ。

洋子やったことあるの。

陽一こないだ、一回練習行った。

洋子だれと。

陽一お客様センターの人と。

洋子すごいな。

洋子は少し感動している。

陽一だから。やっぱ。もう一回、一緒に住みたいんだけど。無理かな。

洋子、真面目な顔になる。

洋子・・・無理。

陽一どうして。

洋子・・・生活があるから。

陽一なに。

洋子ってこと。

陽一・・・えなに。結婚とかしてるの。

洋子じぎね。

陽一、少しだけ笑う。

洋子もつられて笑う。

陽一・・・必死だな。

洋子ごめんね、突然来て。

陽一ううん、うれしいけど。

洋子でももうこないから。絶対。

陽一・・・。

洋子、タイムカードを見る。

陽一　なんだか、俺の歴史が詰まってる感じしない？・・・8時58分、8時55分、8時43分、8時50分、8時46分・・・。

音楽入る。

洋子、タイムカードを陽一に返し、陽一はそれを受け取る。

洋子、立ち上がる。陽一は見上げる。

洋子、ゆっくりと部屋を出て行く。

陽一、座ったまま、洋子を目で追うことなく、タイムカードに視線を戻し、じっと見つめる。

溶暗。

おわり。